

柿泥棒

桜新町の駅に、いつものリュックサックを背負って優子がやってきた。

「小鳥ー!! もー。新宿まで来てくれるって言うてたやん」

「ごめんごめん、完全に寝てもうてたー」

半年ぶりに会う優子は、なんだかちよつと顔が丸々とした気がする。チワワがプリントされたスエットの上下でこの街を歩くのはやめてほしいけれど、それは後で言うことにしよう。と小鳥は思った。優子が来てくれたのが本当は嬉しくて嬉しくて仕方なかった。

「へー。今度の街はなんか小綺麗やなあ。あんたの前おった、稲田堤やったかな。あそことは全然ちやうやん。あつちはなんや大阪みたいで、小鳥にようおうてたのにな」

「サザエさん通りの方へ行ったらもうちよつと下町風情やけどな」

と言ったけど、優子は殆ど聞いてない。いつものことだ。早朝の弦巻つるまき通りを歩きながら、お構いなしに関西弁を撒き散らす優子を見ると、自分が少しづつ東京に染まってきたのがわかった。恥ずかしいと思ったことなんてなかったのに、通り過ぎる人々の眼差

しを痛いと感じてしまふ自分が嫌だった。大声で笑って喋り続ける優子を引き連れて、動き始める社会の流れとは逆走して家へ帰る。スーツ姿の男たちが怪訝そうな顔で二人を見るが、やっぱり優子は気づいてない。

「高速バス疲れたやろ？」

「それがな、もうな、目つむつて気がついたら新宿やったんやって。すごいやろ。ぎりぎりまで病院おつてバス乗り込んだら、爆睡やわ。よー寝たでー」

こう見えて優子は看護師だった。しかも病院内では大人しめだという。

「最近うち走ってるやん？ そやから夜行バス乗っても全然足むくまんようになってん。あんたも走り。じーっと座ってパソコンばかり見てたらあかん。やっぱな、ふくらはぎの筋肉つけな。第二の心臓や。あと股関節な。寿命つてここの筋肉量に比例してるらしいで。うちのばあちゃんに聞いたから嘘かもしらんけどー」

そう言うとき空に向かって豪快に笑った。銀歯が太陽にキラキラ光って、美しいとさえ思った。優子はいつもそうだ。自分の好きなときに笑って、嫌なことにはちゃんと怒って、幼馴染で同じように育ったのにやっぱり自分とは体の作りとか神経の作りとか、いろいろと違っていた。

「ほれ」と言つて優子はズボンの裾をめくってふくらはぎを見せた。むっちりしたハムミたいな足、高校時代よりは痩せたように思うが、むくんでないのかどうかはわからない。

「えー。すごいなあそれ。高速バスなんか、もううちは絶対に無理やもんな」

「そらお金がありましたら、こういうところに住みまして、ほしてJALでぴゅーと行きますけどー。おーほほほほ」

「もう、恥ずかしいからやめてー」

と小鳥も笑った。

大通りを左に入ると、住宅街になって所狭しと家やマンションが立ち並ぶ。軒先に外車が停まった高級住宅の間を小鳥はいつも息を潜めて歩いた。でも今日は優子がいるから違う。優子はまるで美術展にでも来たかのように、いちいち家々の前で立ち止まり車やら門構えやら植物やらをチェックし感想を述べるので、恥ずかしくて、手を引いて先を急がせた。

「なあ、みんな柿取ってないな」

「わかるー。それな」

「こんな敷地狭いののに、みんな柿か八朔か柚子を植えてんのやな。ほんで柿落ちてるやん。もったいないわー。あれ、もらわれへんかなあ」

優子が、赤い実を覗かせた塀の前で動かなくなった。ジャンプするも届かない。何代か前の住人が植えたのだろう、五軒に一軒の割合で柿の木が植わっていた。そのどれもが、たわわに実ったまま熟して落下していた。カラスが寄ってきて食べたのか、大きくえぐら

れている実もある。

「ピンポンして、ちぎってええですかって聞けばくれるんちゃうの？」

「いやいや、やめてよそんなん。変な人やと思われろし」

「えー。でも買ったら柿って今高いでー。二つで三百五十円はすんで」

昔から優子は柿が好きだった。小学校の帰り道いつも山柿を取っては二人食べながら歩いた。熟した柿を皮ごとかじって、ペっペと皮だけ吐き出しながら歩くのが好きだった。あの頃は全部もったり山で取ったりしていたというのに、もはや人と関わってまで、ただで食べようとは思わなくなっていた。人と関わる煩わしさを想像すると、買って食べる方が何倍も楽だった。

マンションに帰ると、夫が会社へ出かける用意をしている。土曜日は休みなのに、わざわざらしいなと思った。

「おはようございます。朝からすみません。今日からしばらくお邪魔いたします」

優子が他人行儀に挨拶をし、土産の日本酒を渡した。

「ああ、優子さん、結婚式のときはありがとう。僕、急な仕事が入っちゃってお構いできませんけどゆっくりしてください」

形だけの会話を済ませると、夫はそそくさと出ていった。

「なんか三日も泊めてもらうのやっぱ悪かったんやないの？ 機嫌悪そうな感じしたけど大丈夫やろか」

「大丈夫やあって。うちらは柴田理恵とマチャミみたいな関係やからって、結婚前から言うてるんやし。柴田理恵の家にはマチャミの部屋あるらしいで。やからな、家の座敷はあんた専用の部屋よ。いつ泊まりにきてもええの。私がそうしてほしいもんな」

「あかんで、そんなん旦那さんの前では言うたらダメやで？」

もう遅い。嬉々として何回も話してしまった。その辺りからだ。結婚前と夫は変わってしまった。冷たくなったというか、同居人という感じになってしまった。

「ほらー。来て来て。あんたの部屋。布団も干して掃除しといたで」

「うわー。すごいー。主婦してるなあ。ありがとう」

二人はびかびかに掃除された座敷で、お土産の赤福を食べ、朝ドラを見、そのまま王様のランチを眺めてしばらくごろごろした。そのうち座布団を二つ折りにして、寝そべりながら既に電話で何百回もしている実家の話なんかを初めてのように話し合った。

昼からは、銀座をぶらぶらしてみた。老舗の喫茶店はドリンク一杯の値段が想像の範疇で高かったが、メニューをよくよく見ると、〈おかわり自由〉と書き添えられている。金持ちはやっぱり粹なことをするもんやなあ、と優子が言った。こうなりや、もう一杯、是が非でも飲みたい。でも予約した寄席が始まる時間が迫ってきていた。やめときゃいいの

に、やっぱり二人はおかわりをした。そして舌を火傷するくらい急いで二杯目のカフェオレを飲んで、汗だくで浅草へ移動した。

夕方四時半に始まった寄席は、既に三時間が経過していた。プログラム通りにいくと、もうすぐ林家ペーが出てくる。正直いって、ペーさん以外は誰も知らないのです、二人はペーさんを見たら帰ろうということになっていた。しかし、皆同じことを考えていたのかペーさんが終わると、ただでさえ三分の一しか埋まってなかった客席が、全員の顔を覚えられるくらいになってしまった。出遅れた二人は、帰るに帰れなくなつて、このままもう少し見ていることにした。

カフェオレをおかわりしておいて良かったなあ、と優子が言った。寄席が五時間も続くんなんて思つてもみなかった。最後の「井戸の茶碗」という演目は抜群に面白く、残つて正解だった。二人は興奮気味に寄席を出るとファミレスでご飯を食べて終電間近の電車に乗り、桜新町駅に着く頃には深夜十二時近くになっていた。高校時代に戻っていけばいくほどに、優子が帰つたあとの時間が怖かった。

駅前に停めた自転車に二人乗りすれば街の風が変わるのを感じる。いつだって運転するのは優子の役目だ。

「なあ、柿食べたいなあ」

気づくと今朝と同じ場所で優子は止まっていた。

「そやな、いずれこれも腐るだけやもんな」

「なあ、ちよつと取つてきてみるわ。このマンシヨンの柿の木やったらわからんやろ」

優子は、自転車を停めると、大きなマンシヨンの前庭に植わった柿の木の下に立った。

近づくと思つたより高くて、ジャンプしてもまったくもつて届かなかつた。ムキになつた

優子が木によじ登ろうとするが、夜中にこれはさすがにまずい。

「警察がたまに巡回してんねんで、この辺。やっぱやめときよ」

「あー、高枝切りばさみがあつたらなあ」

悔しそうに優子はまた自転車を漕ぎ出した。昔から、この筋肉質な厚い腰をつかんでいると、何だつてやれそうな氣になつたが、さすがにこればかりは無理だ。家に帰ると、既に夫は寝ていた。いつもなら一時頃まで起きているくせに。

「アマゾンで買ってみたらどうやろう？」

と優子が言つた。何が？ と思つたら高枝切りばさみのことだつた。優子はいつだつて執念深い。好きな人には二度でも三度でも告白するし、インターハイをかけたバレー部の最後の試合では、小指を骨折していたのに最後の最後までトスを上げ続けて優勝をもぎとつた。そして小鳥だつて負けず劣らず執念深い女だつた。その隣でアタックを打ち続けてきたのだから。思えば小学校の頃から、優子の上げてくれたトスを打ち続けてきた。

「そやな。アマゾンプライムやつたら明日には届くで」

小鳥は高枝切りばさみをポチツとした。

優子が帰る日の早朝、二人は住宅街を、高枝切りばさみと脚立を抱えて歩いた。まるで朝練みたいやなと優子が言った。朝六時前とあって、まだ人々は寝静まっている。

「普通に、普通に。堂々としてたら何も怖いことあらへん」

自分に言い聞かせているように優子が言う。

「そやな、普通に。普通に」

小鳥も優子の後ろを小走りですついでいく。

スーツ姿の中年男性とすれ違うが、脚立にも仰々しいはさみにも気づくことなくスマホをいじりながら通り過ぎた。自転車に乗った学生も駅を目指し一目散に走っていく。野球部あたりの朝練だろうか。斜めがけた大きなバッグを自転車の荷台に載せた姿は、自分たちの頃から変わらなくて懐かしかった。それぞれの朝が足早に通り過ぎていった。この人達が今そうであるように、自分も今まで誰のことも見ていなかったのだと小鳥は思った。

警察に声をかけられたときはこう言おう、住民に怪しまれたらこうしよう、綿密に計画を立てていたのに、拍子抜けするほど誰も見てはくれなかった。殆どの人はここに柿の木があることにも気づいていないのだろう。マンションの住民やオーナーさえも柿を買って食べているのかもしれない。

マンシヨンの柿の木は、しんどそうに枝をしならせて鈴なりに実をつけていた。優子は植木業者になりすまして脚立を立て、その上に登って物干し竿みたいなはさみで柿に狙いを定める。柿の一メートルほど先の二階の部屋からは、電気シェーバーの音が響いている。その隣ではトントンと野菜を切る音が聞こえて、人々の一日が始まるうとしていた。小鳥は何だか胸がぎゅつと熱くなるようだった。

ドサツと音を立ててファースト柿が地面に落下した。

「ちよつと！ やばいやばい。キャッチ機能あつたやろ？」

小声で優子に注意する。もし誰かがベランダに出てきたら試合終了だ。優子はぺろつと舌を出して謝ると、何度か実のついてない枝先を切つてキャッチ機能の練習をした。そしてそこからは、プロのようにスムーズに柿を取り始めた。はさみで切つては、ユーフォーキャッチャーみたいに小鳥の頭上まで柿を運び、小鳥はそれを紙袋の中に収めていく。

十分ほどで紙袋はいっぱいになった。

「なあ、もうええんちゃう？ 小鳥んち、こんなに柿あつても腐るだけやろ？」

「えー。ここまで来たらもつと取りたいわ。ほんであんた大阪持つて帰ればええやん」

「まあなあ」

今度は小鳥が脚立に登つて柿を取る。同じようにキャッチ機能を練習して、柿を取りはじめると、楽しくて楽しくて夢中になってしまった。長い枝の先にぶら下がった柿は思い

の外重くて、二ついっぺんに切れてしまったときなんかは、落としそうになる。

「はよはよー。はよ取ってー」

笑いを殺しながら、優子の手元に確実に柿をまわす。まるであの頃に帰ったような胸の高鳴りだった。真面目くさった顔で優子は柿を袋に入れた。

インターハイを勝ち取ったあと、優子はすぐ病院に運ばれドクターストップを受けた。お陰で肝心のインターハイは一回戦負けだった。何度も何度も監督に食い下がって、自分は出られると訴えたが叶うわけはなく、優子はベンチで地団駄を踏みながら声を出し続けた。あれを最後に二人ともきっぱりバレーとはおさらばして、優子は看護師になり、小鳥は結婚して大阪を離れた。

「もうええんちゃうの。あんた、そろそろ旦那さん、会社行く時間やない？」

「うん、ほな帰るか」

改めて柿の木を見上げてみると、どこを取ったかわからないくらいに、まだまだ実っていた。帰り道、すれ違う親子や小学生たちの誰も、自分たちを見るものはいなかった。「自意識過剰やったな」と優子が言って、何が可笑しいのかわからないが二人は終始にやした。

帰ったら、夫は出かけた後だった。

「なあ、あんたらうまくいってんの？」

「ああ、うん。どうやらなあ。柿は間違いなく一緒に取ってくれんな」

「まあ、それできる旦那やたらうちも結婚したいわ」

と言つて優子は銀歯を見せて笑つた。そして、玉入れの最後みたいに、袋の中から「いち、にーい、さーん」と声を出しながら一緒に数えた。よんじゅにーと言つて、吹き出し、床に倒れて笑い転げた。可笑しくて可笑しくて、明日からを思うと泣けてきそうだった。さっそく優子が柿をむき始める。その間に、小鳥は昨夜タイマーにしていた洗濯を二階へ干しに行った。

ペランダの上に広がる小さくて大きな空に、羊の毛のような雲が連なっている。何かを成し遂げた朝は気持ちがいいもんだ。あの高枝切りばさみで、来年は一人で柿を取りにいけるだろうか。優子なしでも。夫のトランクスを持ったまま空に大きな伸びをしたとき、「げげげー！ 渋柿やー!!」

という優子の叫び声が、ペランダを通り越して青空の向こうまで突き抜けていった。

「うそやー！」

小鳥は階段を駆け下りた。

優子がせっせと皮をむいてくれた四十一個と半分の柿が、立派に干し柿となり古びたペランダに揺れている。二人の柿への思いがここに実を結んだわけだが、渋を抜いてまで柿

を食べようと考えた先人の執念はすさまじいものだと思った。生命力とはそういうことを言うに違いない。

小鳥はパジャマのまま一口しかないコンロにやかんをかけ、何も無い部屋で干し柿を食べた。干し柿ってこんなに美味しかっただろうか。高級フレンチで食べた子羊のなんちゃらよりも、カウンターで食べた寿司よりも、ゴディバのチョコよりも自分達で取ってきて手でむき、干した食べ物に至極であった。部屋の広さが五分の一になったはずなのに、随分と広く感じるのは、この柿が美味しすぎるのと同じことだ。何よりもこの自由が美味しく清々しい。

あの夜、夫は、干柿が並んだ物干し竿を見た瞬間、何か吹っ切れたように別れを切り出した。反論もしないが言い訳する必要もはやなかった。

——朝っぱらから電話が鳴った。

優子が昨夜のメールを見たのだろう。相談する必要がない程にスムーズにゴールテープを切ってしまったから、この気持ちをどう説明すればいいかわからない。でもやっぱり優子の電話が嬉しかった。

「あなた、どうすんのやー。干し柿ごときで離婚て、あほか」

「あんたのせいやろー。目覚めさせたんはあんたや。あんたが教祖様やろ」

「干し柿の教祖って。うれしないわ」

「まあ、あと四十個食べてから考えるわ。とりあえず、干し柿食べにきいや」

「ほんまやな。ほな今度の三連休にまた行くわ。ほんでどこにいんの？」

大阪に帰った方が早い気がしたけど、何となく小鳥はまだここにいようと思った。優子くらいにゆるぎなく自分になるまでは、まだここで来年も柿を干そうと思った。